

夜の果てに(4)

フリード・ランペ著
松川 弘*・訳

(平成24年9月27日受付)

Am Rande der Nacht (4)

von
Friedo Rampe

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Sep. 27, 2012)

さあ、さあ、おいで、フィップス。茶色の小さいダックスフントがアッディの呼び声におびき寄せられてこちらに走ってきた。犬は、大きなブナの木の前立に立って、首をもたげ、好奇心でキラキラしたいかにも正直そうな目で、梢にいる自分の主人を見上げていた。その長い耳は聞き耳を立てるように硬直し、短いすべすべした尻尾は、興奮と喜びのあまり激しく振られていた。歌声が突然、アッディがどれだけ調教してもフィップスに教え込むことのできなかったことを可能にしたのだ。明るく優しい歌声に引きずり上げられたように、フィップスは後足で立ち、前足を上品に曲げて、ちんちんした。興奮して頭上を見上げ、短い尻尾でうれしげに床を打ちながら、犬はそのままの姿勢ですわっていた。

後足で立った犬の幸せそうな悪戯っぽい顔を見た人々は、おもしろがって笑った。彼らは犬を指差し、吹き出した。たいていの人々が、それを出し物のひとつと思ひ、事の成りゆきに喜んだ。それはともかく魅力的な演技だった。何とも思いがけない楽しい展開だった。母親たちは子供のことを思い、彼らが寝ていてこれが見られないのを残念がった。

「鳥の真似か。」オスカルは首を振った。「すべてがわざとらしい。早めに船に戻れるように、時計をよく見てくれ。」

「僕たちが戻ったとき、パウアーがもういなければいいんだが」と、アントーンが言った。

「やつが利口だったらね。」

催眠術師は、あいかわらず指揮するように腕を動かし、頬を紅潮させて晴やかに頭上を見上げていた。人々の笑い声を聞いた彼は、床に小さな犬がすわっているのを見た。彼の手はまだ指揮を続けていたが、上機嫌の笑いは彼の顔から消え、不機嫌そうに怒りを抑えた彼は、犬をにらみつけた。

「あの子ときたら、いまいまいくらいよく歌うね。でも、あの犬は頂けないよ」と、オスカルが言った。

もっとよく見ようとして、二人は立ち上がった。「あの賢そうな目を見ろよ。」アントーンはこう言うと少し笑った。

催眠術師は終わりの身振りをした。「これでおしまいだ、アッディ、私のナイチンゲール、歌をやめて、降りてきなさい。」

アッディは急に黙った。彼は木の股ですぐ身を起こすと、するすると驚くほど機敏に枝をつたい、軽々と難なく幹をすべり降り、フィップスが彼を見たとき、すでに半分ほど降りたところだった。歌がやむとすぐ、犬はまた前足を下ろし、アッディを見たとき、突然短く、強く、うれしげに吠えはじめた。その吠え声で目が覚めたアッディは目を開け、ギクリとしてあたりを見回した。自分がどこにいるのかよく分からない彼は、真っ青な顔で木や庭、観客や照明を見つめた。手が枝から離れ、彼はよろめいた…

そのとき催眠術師は舞台のそでから飛び出し、木の下に走った。ベランダの闇の中で壁にもたれていた司会者も飛

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

んできた。「落ちるぞ、受けとめてくれ、危ない！」二人は腕で彼を受けとめた。「大丈夫か、怪我はないか」と、アッディの顔の上にかがみ込んだ司会者が言った。「ほら、おじさんはここだよ。」

「僕は一体どこにいるの？」と、アッディは小声で尋ねた。

「ここは舞台だ、分かるだろう。おじさんも、お前のパパもいるよ。」

観客たちは興奮して拍手していた。上首尾の出し物だった。催眠術師は、アッディの首根っこをつかんで立たせた。彼は直立不動の姿勢からお辞儀をし、アッディの頭を押さえつけねばならなかった。「お辞儀をして、もうしばらく頑張るんだ。」フィップスはアッディと並んで立ち、尻尾を振りながら彼を見ていた。フィップスの横には司会者が立ち、気遣わしげに少年を見つめていた。

楽団が勇壮なマーチを演奏し始めた。催眠術師は少年を、ニレの木が生え書き割が置いてある裏庭に連れていき、木造のバラックの中に入った。アッディは小声で泣いていた。「この泣き虫め。」楽屋で彼は少年を寝椅子に寝かせた。「横になって寝ることができるんだぞ。この上に何がお望みなんだ？ まるで小暴君だな。」彼は笑ったが、アッディはいっしょに笑わず、姿勢を正し、腹に手を当ててのどを詰まらせ、父親を必死に見つめていた。彼の顔は緑がかっていて、青白かった。

「へどを吐きそうになったら、すぐ言うんだぞ。便所へ連れて行ってやるからな。床の上に吐かれると、あとで管理人と一悶着起こるからな。」アッディは吐き気に苦しんでいた。小さな犬は寝椅子のかたわらに立って、首をかしげ眉をひそめ額にしわを寄せて彼を見つめていた。アッディはなおも立ち上がろうとしたが、また吐き気が襲ってきたので、寝椅子の縁にもたれかかった。

「背中を叩いてやると、楽になるぞ。」入ってきたばかりの司会者はこう言ったが、父親がしてやらなかったのが自分でそうしてやった。アッディがぐったりと寝椅子に体を横たえたとき、司会者は言った。「あんた、これが酷使以外の何物でもないことは認めるんだろうな。」

「この駄犬が悪いんだ。こいつが来なけりゃ、万事うまく運んだのに。」催眠術師はこう言うと、床に鼻をつけて嗅ぎ回っていたフィップスを蹴飛ばした。犬はクンクン鳴きながら部屋の隅の方に逃げた。「明日は売り払ってやるぞ、この駄犬め。もし売り払えなかったら、溺れさせてやるからな、分かったか。」

アッディはまた泣き始めた。彼は起き上がると、部屋の隅のフィップスのところに行こうとした。「お願いだから、フィップスを痛めつけないで。痛がってるよ！」

父親は息子のセーラー服の襟をつかむと、弾みをつけて

彼を寝椅子に投げ戻した。「お前はそこにいるんだ。」

突然、彼はあることを思いついた。彼は司会者に言った。「あの犬を組み込んだ出し物を作るってのはどうかな？ あいつは添え物にはお詠え向きだ。」

「その点については何とも助言しかねるよ。」司会者はこう言うと、楽屋を出ていった。

二羽の白鳥が、小屋の前で羽毛に頭をうずめて眠っていた。小屋は濠の真ん中に浮かんでおり、水は黒く濁っていたので、のぞき込んでも何一つ見えなかった。明かりはどこにもなく、空気は蒸し暑く、白鳥や小屋、水の上ののしかかっていた。すべてが分厚い黒い闇に覆われていて、その中を無事に通り抜けるのはむずかしく思われた。空気はきな臭く人を取り囲み、群がって、前進の邪魔をしていた。しかし、すべてを見ようとすれば、濠の上に行くよりほかに仕方がなかった。何も見たくない、とルーゼは思った。ここで起こったことは何も見たくない。しかし、彼女はひっぱり出され、すべるように進み、水上を漂っていた。岸からは見えなかった白鳥が、彼女には見えた。白鳥の羽毛がこんな闇の中でも鈍い微光を放っているのは不思議だった。それは今もお灰色がかかった白い微光を放っており、近づけば近づくほど、次第に輝きを増し、白さを増していった。そのとき、岸の方からチューチュー鳴き声がした。ルーゼは白鳥たちを助けたかった。何が来たのか、彼女にはよく分かっていたが、救いの手を差し伸べることはできなかった。彼女はまったく身動きできなかったのだ。彼らは一体どこにいるのだろうか？ 鳴き声はかすかだったが、あちこちから聞こえていた。彼らはこっちへやって来るつもりなのだろうか？ だが、彼らは泳げないはずだ。ルーゼはほっとして、少し笑いさえた。ところが、次の瞬間、彼女はひどいショックを受けた。彼らは泳げたのだ。彼らは、バシャバシャ水中に身を躍らせた。ルーゼには彼らの姿は見えなかったが、音は聞こえた。小さな足とすばしこい尻尾をしきりに動かしながら、彼らの小さな丸い体は波を切って進んでいく。あっ、跳んだ！ 一匹が白鳥の小屋の板に跳び上がった。続いて、二匹、三匹と跳び上がった彼らは、白鳥の白い体にかみついた。白鳥たちは目を覚まして叫び声を上げ、かまれて半死半生になり、首を長く伸ばし、かん高く訴えるように鳴き、羽根をもう一度大きく広げ、それを不安げに打ち振った。どの白鳥の体にもねずみが二、三匹ぶら下がり、その哀れな獣を揺さぶり、引っ張り、引きむしった。血が白鳥の白い体を伝って流れをなして水中に落ちていた。水が跳ね上がり、羽毛が飛び散って流れに落ちた。板の端にいた白鳥も水の中に沈んだ。彼らは、あの吸血鬼たちに深みに引きずり込まれ、姿を消した。

ルーゼはその場に居合わせていたが、傍観するだけで何も手出しできなかった。彼女は水面をあちこち滑るように進んだが、助けようがなかった。彼女は口を開いて叫びたかったが、血の混じった水の中に、のどを鳴らしながら引きずり込まれていった。

そのとき、彼女は突然叫ぶことができた。血の混じった水をのどに引っかけて、彼女はのどをゴロゴロいわせた。「白鳥が、白鳥が危ない！ ねずみが来る！」

ルーゼは、母親を凝視した。彼女はベッドの前に立っていた。ナイトテーブルの電燈がついていた。

「ママ、ねずみたちが白鳥に襲いかかって、かみ殺してしまったのよ！」

「あなたは夢を見てたのよ。白鳥やねずみがどこにいるっていうの？ みんな夢なの。」

「濠にいるあの白鳥よ。」ルーゼはこう言って、母親の方を見た。彼女にこのことをどう説明すればいいんだろう？ 母親は、丈の長い白いナイトガウンをはおって立っていた。お下げに編んだ彼女の髪が、小さな短い尻尾のように垂れていた。彼女はルーゼを元気づけるように微笑みかけた。「自分が夢を見ていたことが分かった？」

ルーゼは、憂いを帯びてはいるが親しげな母親の顔を長い間見つめていた。彼女は見慣れた部屋の中にいた。開け放たれた窓越しに、そよとも動かぬ丸みを帯びた樹冠が闇の中に見えた。フルートの調べとヘニッケ氏のあずまやのざわめきも聞こえてきた。

「本当に怖かったわ。ママ、ねずみが白鳥をかみ殺すことってあるの？」

「馬鹿な」と、母親は言った。「あの小さな獣が？ 白鳥は自分の身を守ることができるのよ。くちばしでかみつくこともできるはずよ。あのくちばしでかまれれば、ねずみなんか簡単に死んでしまうわ。」

「本当なの？ あの大きなくちばしでそんなことができるの？」「もちろんですとも。あのくちばしには、たいへんな力があるのよ。」

「あんな邪悪なねずみがなぜいるのかしら？」ルーゼは愚痴をこぼしながらあくびした。

「今のところはね。でも、みんなで駆除するように努めているから、あたりを見回したらもう一匹もいなかったっていう日が来るかも知れないわね。さあ、またお眠りなさい。」

彼女はルーゼの汗で湿った額をなでた。「もう何も心配いらないからね。」彼女は、ナイトテーブルの電燈のスイッチをひねって消し、引っ込んだ。しかし彼女はまだすぐには床につかず、穏やかに美味しい庭の空気を吸い込もうとして、窓辺に近づいた。そして彼女は深々と息を吸った。ルーゼの叫び声が彼女の目を覚ましたのではなかった。

彼女は眠れないまま、目を開けて横たわっていたのだ。

ベルク氏のフルートの調べは、冷たくたゆたうように、透徹した明確さで聞こえていた。

彼女はしばらく窓の下枠に寄りかかっていた。なま温かい微風がナイトガウンを通して彼女の肌当たった。

「あの階上に女性がいるのが見えるだろう」と、税関吏が首を揺すりながら言った。「窓辺にいるナイトガウンをはおった女性だ。身じろぎもせず、もうかなり前からあそこに立っている。何か思い当たる節はないかね？」

ヘニッケ氏は、一方の手に切手を、もう一方の手にルーペをもったまま、見上げた。「彼女は夢を見てるんだろう。おそらく亡くなった主人のことでも考えてるに違いない。彼が死んでからもう二年になる。主人をあんなに早く亡くすなんて、彼女も気の毒だ。彼らは本当に仲むつまじかった。以前は、夜になるとよく二人で一緒に窓辺に立っていたものだ。あれは、僕の可愛い生徒ルーゼの母親なんだ。」

「彼女はおそらくもうしばらくフルートの演奏を聴いているつもりなんだろう」と、税関吏は言った。

「分からないな。」ヘニッケ氏はそう言うと、切手の方に目をやった。彼はルーペを通して見ていた。「轟音を立てる火山と原住民の小屋の図柄か。なるほど。このジャマイカの切手をボルネオの切手と交換する気はないかね。」

「困った奴だ」と、税関吏はブツブツつぶやいた。「自分の欲しいものは何としてでも手に入れるんだからな。もうこれでお開きにしようぜ。」彼は、襟の高い上着のボタンをかけながら、最後にフルートの調べを聞いた。ヘニッケ氏は、ジャマイカの切手をそっと慎重に貼りつけたあとでアルバムを閉じ、テーブルにのせてあるランプを手にした。彼らは庭の中を、次いで地階を通っていった。洗濯場では、張り渡されたロープにかけてある洗濯物の下をくぐり抜けるために、彼らは少し身を屈めなければならなかった。それでも湿った洗濯物が冷たく彼らの顔に当たった。「ランプに気をつけろよ」と、税関吏が注意した。だが、ドームから少し突き出たランプのほやに洗濯物が当たって、炎が消えてしまった。「軽率な奴だ」と、税関吏はつぶやいた。「丁度いいや。ランプはもういらんよ」と、ヘニッケ氏は言った。「でも、火災の危険がある」と、税関吏は言った。「洗濯物は湿ってるんだよ」と、ヘニッケ氏が言い返した。台所には女中のメータがすわっていて、ランプの下で手紙をしたためていた。彼女は、オットー宛てに、彼がやって来ない理由を聞いたかしていた。彼とはもうこれでおしまいかも知れない。

地階のドアのところでヘニッケ氏と税関吏は別れを告げた。「それじゃ、おやすみ。」「おやすみ。」

「もし君の都合がよければ、明日また来るよ」と、少しした

めらいながら税関吏は言った。

「もちろん、いつ来てもこっちは構わないよ。」

「君を退屈させたり、邪魔したりすると心苦しいからね。」

「そんなことはないよ」と、ヘニッケ氏は言うと、親愛の情を込めて税関吏をこぶしで突いた。「この馬鹿野郎。」

税関吏は感謝しながらヘニッケ氏を見つめた。「それじゃ、行くからね。」彼はもう一度手を差し出した。「おやすみ。」

「おやすみ。」ドアの呼び鈴が鳴り、税関吏はそこからざごちなく勿体ぶって歩み出た。彼は、人気のない通りの街灯の下を、税関の建物とは反対方向に歩いていった。税関の深紅色の建物は、アストリア館の向いにひっそり立っていて、窓の明かりは消えていた。

ヘニッケ氏は台所に入ると、ランプをテーブルの上に置いた。彼は大判の緑色の切手アルバムをかかえていた。「メータ、もう寝なさい。」

おずおずと、はにかんで微笑みながら、メータは手紙から目を上げた。彼女の青い目は素朴に柔和に輝き、彼女の太く束ねた髪は、小麦のように黄色く光っていた。

ヘニッケ氏はずるそうに微笑みながら彼女をひやかした。「ラブレターかな？」

「そんなんじゃないありません」と、メータは言うと、悲しげに微笑んだ。「絶対に違います。」この人は、あの男が自分に愛想をつかしていることが分からないんだ。あのとき、一緒に土手の草むらに寝転んで、彼にすべてを許ささえしなければ。あの男はただそれが目当てだったんだ。今、彼は私に飽き飽きしている。

「たとえ彼がどんな男だろうと、もう君は寝ることだね。」

「ええ、ヘニッケさん。」ヘニッケ氏が立ち去ったあとで、彼女は手紙の結びを書いた。「私に構わないでください。私はあなたのことをまったく当てにしていませんから。もう私のところに来ないでください。私が土手のかたわらに横たわり、慰み物になることだけがあなたの望みだったんでしょう。私には、あなたがどういう人間か、今はっきり分かりました。私はもう二度とあなたのような人にはだまされません。」

ダンスが終わり、ペアは高いダンスフロアから降りて、自分たちのテーブルに戻った。航海士はまたベルタと踊っていた。「もうかなり前から意地の悪い目つきである黒人を見つめているところからすると、君は木曜の午後に僕のところに来る気はないんだね」と、彼は言った。「もうその気はないわ」と、ベルタは素っ気なく言った。「あなたぐらいの人なら、それこそ山ほどいるわ。」「あの黒人とせいぜい楽しむがいいさ。奴は前からあなたの尻を追い回していたからな。」航海士は雑踏の中で彼女から身を離れた。黒人は

彼女のそばに歩み寄ってきた。彼女は、彼の潤んだ力強い瞳の中をのぞき込み、彼の青みがかかった白目やまくれ上がった唇、毛穴の大きなでこぼこの褐色がかかった青い皮膚を見て、魅力的で頼もしげな彼の笑い顔に夢中になった。「来てくれ」と、その黒人は言った。彼は、テーブルの間を通り抜けてベランダに向かった。ベルタは、航海士と自分の夫の方を見やり、黒人のあとを追った。ベランダの裏の壁のところに、舞台と木造のバラックの間の中庭に通じるドアがあった。中庭にはニレの木が生え、書き割りが置かれていた。彼らはそのドアを歩いていった。

か細く暗いゴングの音がフロアに鳴り響いた。司会者が舞台上に登場し、シンバルを打ち鳴らした。そこで生じた静寂の中で、彼は叫んだ。「ご来場のみなさま、お次はいよいよレスリングです。どなたも、新たな見物のためのエネルギーを蓄えられたようにお見受けします。二人の名レスラー、ディークマンとアルバロスが登場いたします。この二人はまだ一度も対戦したことがありません。本日が初の対戦になります。ディークマンは老練な無敵のベテラン、アルバロスは若きホープ、強力な新人で前途洋々たる若者です。この二人のレスラーと契約を交わし、みなさまにこの特別試合をご覧いただけることを、私どもは誇りに思っております。それでは、バンドマスターさん、お願いします。」バンドマスターは自分の席に戻り、バンドは高らかに『いざ出陣だ、闘牛士』の曲を軍隊式に演奏し始めた。

司会者は、腕組みしながら舞台の壁にもたれ、静観していた。二人の少年がテーブルを選び入れ、それをうしろの方に置いた。さらに椅子が二つ運び込まれ、山高帽子をかぶり太い時計の鎖を腹に巻いた太った愚直な二人の男があらわれた。彼らは椅子に腰かけ、一人が書類かばんを開けて、チョッキのポケットから万年筆を取り出した。この二人は審判だった。それから、ジョニーに導かれてハイン・ディークマンがやってきた。彼はいささか硬くなり、不機嫌そうにぼんやり下からリングを見つめていた。「さあ、これから対戦だ」と、ジョニーはささやき、腕をつねった。「気分はどうだい？」「最高だ」と、ハインは陰気に答えた。「ありったけの力を絞り出すんだ」と、ジョニーはささやいた。「いまさら改めて言うまでもなかるうが。」ジョニーは彼を送り出すと、司会者のかたわらに戻った。ディークマンは不機嫌そうにお辞儀をした。観衆は、盛大な拍手と歓呼の声でハインを迎えた。しかし、ハインの無作法な振舞いに感情を害している者も何人かいた。あの男はうぬぼれている。どうして奴には好き勝手が許されているのか？ 本心を言ったらどうなんだ、ハイン。ともかく、事のなりゆきを見守っていてやるからな…。アルバロスの熱狂的なファンが何人か、口笛を鳴らした。

ざごちなくいくらか腰をかがめて、ハインは舞台ばなか

ら引っ込んだ。

「奴はどうしたんだ？ なぜあんなに不機嫌なんだ？」と、司会者が尋ねた。

「ああ、今しがた、アルバロスとひと悶着あったからな」と、ジョニーが言った。

司会者は口笛で相づちを打った。「もうけりはついたんだろうね？」と、彼は尋ねた。

「ああ」と、ジョニーは言った。「奴がああ可哀な若者をどんな目に遭わせるか、見てれば分かるよ。彼には笑い事じゃないからね。」

アルバロスは、しなやかな身のこなしで舞台ばなに歩み入ると、形のいい腕を品よくあげてお辞儀をした。はじめのうち、拍手はハインのときほど盛大ではなかったが、次第に大きくなっていった。人々は、赤銅色に輝く彼の張りのある鍛え上げられた体、無駄のない確固たる身のこなし、その颯爽とした態度を、満足そうに眺めていた。アルバロスの黒髪は光を反射して輝き、彼の視線は力強く、微笑んだ口許には白い歯がのぞいていた。女性たちは、彼の皮膚にその視線をさまよわせていた。彼女らは前かがみになって拍手し、熱狂していた。

「奴は偉丈夫だ。彼のその点は認めざるをえない」と、アントーンは言った。「それにひきかえ相手は太っていて醜いときてる。」

「この試合は見物していこうよ」と、オスカルは言った。「それから船に戻ればいいんだ。」

「そうしよう」と、アントーンは言って首を伸ばした。彼らの隣の太った男は目を覚まし、前かがみになって帽子を後ろにずらし、アルバロスをにらみつけていた。「忌々しい、何て奴だ、ギリシア人め！」

「ギリシア人だって？ イタリア人かスペイン人の方がまだましなのかい」と、オスカルは言った。

「仕方ないなあ。文字通りに取ってくれちゃ困るよ。」

アルバロスは軽やかに引っ込み、姿勢を正して立ち上がった。彼のふくらはぎや堅い太腿は、まるで若駒のように震えていた。ディークマンは、不機嫌そうに探るような目つきでアルバロスの方をうかがっていた。彼は何かブツブツ独り言を言っていた。

司会者は、ニータとフレッドに気づいた。彼らはベランダの前の脇の方に立っていた。二人とも、人目を引く衣装の上にサマーコートをはおっていたが、ニータの服の鱗が首もとでちらちら輝いていた。緊張した表情でアルバロスの動きを目で追っているニータを、フレッドは冷たく凝視していた。

「あの老人が一番前の列にすわってる」と、ジョニーは言った。

司会者は、アストリア館の支配人を見た。彼が一番前の

列にすわっているなんて、大変だ。彼は、晩に一度だけ、決定的な瞬間に姿をあらわした。彼はブクブクに太っていた、てかてかした髪をうなじのところまでびっちり分けていた。彼のぬめぬめした視線は、夢見るような悲しみを込めて、若いレスラーに注がれていた。彼は手をかかげて、弱々しく拍手しようとさえした。それから、短い指に指輪をはめた彼の手は、ふたたび太った太腿の上で伸ばされた。

あとで彼のところに行って、旅行を許可してくれるかどうか聞いてみよう。司会者はそう決心した。わずかな時間だが、彼は家に戻って善行を積むことができるだろう。花束をもって妻を見舞い、住居に鍵をかけ、子供たちを児童ホームに連れていく。こんなことがすべて可能なのだろうか？

試合開始の時間になった。司会者はバンドに演奏をやめるよう合図を出した。演奏は中断された。「用意！」と、彼は叫んだ。ディークマンとアルバロスは向かい合って立ち、司会者は小さなホイッスルを口に当てて吹いた。「始め！」と、彼は叫ぶと、腕をすばやく振り下ろした。

ディークマンとアルバロスは格闘を始めた。音楽は、低く彼らの動きを挑発するかのようになり響き、大きくなって突然やんだ。レスラーたちは、しっかりした攻撃点を見つけるために、手を探るようにビシャピシャ相手の体に当たった。彼らはすべり落ちて離れ、改めて接近し、もつれ合い、二匹の豹のように無言で絡み合った。彼らはなかなか体をしっかり組み合わせることができず、短い間隔で絡み合い、お互いに払いのけ、また組み合った。それはいわば四肢の無言の戯れだった。しかし、体が触れ合うたびに、彼らは次第に興奮を高めていった。接触が彼らを刺激し、圧縮し、摩擦によって電流を発生させた。

アルバロスは、最初はより敏捷だった。ディークマンは、相変わらず鈍重で重苦しかった。アルバロスは彼の手をすり抜け、ふたたび飛びかかり、体のまわりをしなやかに回った。そしてディークマンの腕をつかむと、体を反らせ、投げられては落ち、また起き上がって、改めて彼に飛びついた。

ディークマンは、突然、アルバロスの体をとらえ、床に倒した。そして、覆いかぶさると、彼をあおむけにするために、その上腕をがっちりつかみ、自分の脚を相手の脚に絡み合わせ、もがき、あえいだ。「やっとなつかまえたぞ、小僧。いつまで我慢できるかな？」「まだまだ。」アルバロスはこう叫ぶと、ディークマンをさっと脇に投げ彼の首をつかんだ。ディークマンもまた相手の首をつかみ、彼らは床を転げ回った。彼らは、もがいて体を起こし、またゴロゴロ転がった。アルバロスは、がら空きになったディークマンの脚に飛びついた。「いいぞ」と、観客は拍手した。「やっつける、アルバロス、やっつけるんだ！」

太く短い首を前かがみにして、ディークマンはまたしても突進した。「くそつたれめ」と、彼は激怒しながらつぶやいた。彼はアルバロスの肩をぐいとつかんだ。「さっきはうまく逃れたな。だが、今度はこっちのものだ。」彼は、自分の脚をアルバロスの脚に引っ掛け、彼を投げ飛ばし、ふたたび彼の上にのしかかり、ニタニタ笑った。「まさかこうなるとは思いもしなかったろう、どうだい？」彼は、アルバロスの体をつかむと、ちょうど十本の腕で同時にマッサージするように彼をしっかりホールドし、分厚い唇と目をまたしてもアルバロスの胸や喉もとに密着させ、含み笑いをした。「あんたは完全に俺に組み敷かれている。どんな気分だい？ そんないやな目つきで見つめるなよ。」「この下司野郎め！」アルバロスはこう叫ぶと、目をギョロギョロさせた。

「奴は今、俺に組み敷かれている。自分が望むと望まざるとにかかわらず。」ディークマンは忍び笑いをした。アルバロスは体を斜めに回転させたが、抜け出すことができなかった。「この野郎、恥を知れ」と、彼はののしった。

司会者は、レスラーたちの上に身をかがめた。「ディークマン、何のつもりなんだ？ ディークマン、正気に戻るんだ。」彼は口笛を鳴らした。ディークマンは、もうそんなことを気かけなかった。彼には何を言っても無駄だった。彼はアルバロスの上を駆け回り、笑い、独り言を言い、素早くアルバロスの体にさわったが、彼が脱出しようとしたとき、ディークマンは彼をクリンチし、自分の体を押しつけた。

審判たちはテーブルから身を乗り出し、その一人が小さなベルを必死に打ち鳴らした。司会者は口笛を鳴らし叫んだ。「ちょっと待て！」ジョニーは床を足で踏み鳴らしながら叫んだ。「ハイン、ハイン。」支配人は、最初のうち、輝く目を見開いて腰かけていたが、「こりゃいかん。一体何事だ？ これはレスリングなんてもんじゃない」と叫んで飛び上がると、リングに通じる木の階段を駆け上った。「試合は中止だ。こんなことは私の店では許されない。」

観客たちは椅子から立ち上がり、舞台ばなに近づいて、憤激して叫んだり、リングを見つめたりしていた。「ディークマンをやっつけろ。ディークマン、やめるんだ。」

そのとき突然、頭に血をのぼらせ目が据わったディークマンは、アルバロスを釘付けにしたままで体を起こし、急にこぶしを固めてアルバロスの体をあえぎながら叩きだした。顔を叩いたので鼻から血が流れ、口を叩いたので唇がひび割れた。彼はとこるかまわず殴打した。アルバロスは体を起こそうとしたが、打撃が繰り返し彼を襲った。

観客たちは叫び、口笛を鳴らし、こぶしを振り上げて威嚇した。「くたばれ、ディークマン。ディークマンをやっつけろ。とびきりの乱暴者め。」全員がテーブルから立ち上が

り、リングの前に立ち並んで、首を伸ばして二人のレスラーを見つめていた。ウロウロ走り回る者も多く、もう店を出ていこうとする者さえいた。彼らはボーイに向かって「勘定！」と叫んだ。

支配人は、大きなメガホンを口に当てて舞台ばなに立った。「みなさん、ご安心下さい。ちょっとした思いがけない突発事故が起きました。席に着いて下さい。出ていかないで下さい。舞台は片づけます。すぐ元通りになります。バンドマスター、何か明るい、感じのいい曲を演奏してください。みなさん、踊って下さい。楽しんで下さい。申し訳ございません。まだまだ素晴らしい出し物がございます。最高のナンバーはこれからです。」

バンドの演奏がまた始まった。支配人はメガホンを司会者に渡した。「これは本来君の役目だったね。大事な時にはいつも自分で何かしないと気がすまないんだよ。」彼は、いくらか落ち着きを取り戻したフロアを悲しげに見つめた。「ともかくあの二人を引っ込めるんだ」と、彼は言った。ニータとフレッドは、アルバロスのかたわらに立っていた。フレッドは身じろぎもせず、アルバロスの傷だらけの体を凝視していた。「ここにあんたのヒーローが横たわってるぜ」と、彼は小声で言った。ニータは自分のコートの前を押えるのを忘れていた。彼女の服のウロコが、舞台ばなの照明を浴びてほのかに光っていた。彼女は鼻水をすすりながら言った。「ああ、いやだいやだ。」

審判と二人の少年がアルバロスをリングから運び出した。彼らが中庭に入ったとき、ベルタはこの集団を認めた。彼女は、黒人と一緒にニレの木陰のベンチにすわっていた。「一体何が起こったのかしら？」と、彼女は言った。「うんざりだよ。」黒人はニヤニヤしながらそう言うと、彼女の脚をなで上げた。彼女は黒人の手を叩いた。「いい加減にしてよ。先に行くわ。あなたはもうしばらく待ってて。」「これでもう終わりなのか。」「あなたには十分過ぎるってことはありえないよね。」ベルタは、衣服と髪を少し整えて立ち上がった。「あそこにまた情けない男がやって来るわ。」フロアからかん高い口笛が聞こえてきた。「ディークマンか」と、黒人が言った。ディークマンがジョニーに支えられてやって来た。疲れ切って足がぐくぐくさせた彼は、ジョニーにつかまりながら、フロアから中庭に通じる小さな木の階段を登ってきた。彼は打ち沈んでいるように見えた。

「この愚か者め、悪魔にでも取り憑かれたのか？」と、ジョニーは言った。「俺は何という下司野郎なんだ」と、彼はため息をついた。「自分がこんなに下劣だとは、今の今まで気づかなかった。」涙が彼の目からあふれた。

「いつかはこんなことが起きるような気がしていたんだ。」「彼らはもう、多くを望んでいない、そのことが、俺には

我慢できないんだ」と、ハインは言った。「なあ、これでもう気がすんだだろう」と、ジョニーが言った。

ハインは楽屋の寝椅子に身を横たえて、天井を凝視していた。

「そんなに悲観するなよ。」ジョニーはこう言うと、元気づけるように武骨な手でハインの肩を叩いた。「もうすんだことだ。」ハインは頭を震わせた。冷たい照明の中で彼の頬は涙にぬれて光っていた。「こんなものが自分の心の中に潜んでいたなんて、気がつかなかったよ。」

観客は、また自分の席に戻って、今しがたの事件について興奮した面持ちで語り合っていた。演奏は続いていたが、誰も踊ろうとはしなかった。帽子を斜めにかぶった藤色の制服の少年が、リングの床に膝をついて、布で血をぬぐっていた。「君、乾いた布を使うんだ、それじゃだめだ」と、支配人は愚痴をこぼした。その少年は、おどおどしながら床の血の跡と支配人の顔を見て、布を持った手を震わせていた。「こんなことはそもそも少年向きのまともな仕事とは言えませんな」と、司会者はためらいがちに言った。「もちろんそうだが、これが今彼らに与えられた仕事なんだ」と、支配人は言う、絶望したように頭を振った。「こんな仕事にも慣れておかねばならない。それじゃ、冷たい水の入ったバケツとほうきを持ってくるんだ、分かったね？」その少年は飛び出していった。「支配人、実は折り入ってお願いしたいことがあるのですが。」「私事かね？」支配人はこう言うと、彼の顔を疑り深そうに見つめた。「ええ。」「でも今はだめだよ。よくそんなことが考えられるね。不思議でならない。まず、雰囲気づくりが肝心だ。リングの有様を見ると、泣きたくなる。だから、私事はあとにしてくれ。あとでオフィスに来てくれ。どっちみち、一度君とは話をしたいと思っていたんだ。」

オスカルとアントーンは、ビールの勘定を済ませると立ち上がった。「おやすみなさい」と、彼らは隣の席の男に言った。その男も挨拶を返して、満足げに彼らを見つめていた。

アーチ形の門を通過して外に出て港通りに入ったとき、アントーンが言った。「今晚は本当に妙な晩だ。まずパウアーの一件、それに今度はあの騒ぎだろう。」

「マールブルクの僕の下宿部屋に腰を落ち着いたら、さぞかしほっとするだろうね。」

「ねえ、これで本当に、アムステルダムでカルヴァンの仕事に取りかかれるのだろうか。」

「神のみぞ知るさ」と、オスカルは言った。

少し青ざめて、ためらいがちに、ベルタはカールのテーブルに戻ってきた。「一体何が起こったの？」

「君は今までずっとどこに隠れていたんだ？」

「ええ、胃の具合がおかしくなったので、ちょっと姿を消

していたのよ。でも、今はもう大丈夫。」

「その間に、奴らはここで、ほとんど相手を殺しかねないくらい激しく殴り合っていたんだ。」

「あなた、ペーターっていうの？」と、ファニーが言った。「何て退屈なペーターなの。」彼らはベッドに潜り込んで、あごのところまで毛布をかぶり、手枕をしていた。彼女はとがめるように彼を見つめていた。

彼の方は彼女を見向きもしなかった。

「本当に服を着る気なの？」

「見れば分かるだろう。」

「服を着てそのまま出ていくつもりなの？」

ペーターは陰気にうなずいた。

「今日ほとんど日になるとは思ってたのよ。」

「まあ、確かにいつもとは違う一日になったね」と、ペーターは言った。

「僕も君のことが気に入ったし…」

「ちょっと来てよ」と、ファニーが言った。彼女はベッドから身を起こすと、彼を自分のベッドの縁に引っ張っていった。彼女は、彼の顔をのぞき込んだ。「あなたは、つい今しがたまで私に親切だったわ。もう私のことが嫌になったの？」

「いいや、そんなことはないよ」と、ペーターは言った。

「この大きな赤い唇はあなたのものなのよ。それでもあなたは興奮しないの？」

ペーターは脇を見ていた。「そんなこと、自分の口からは言えないよ。」

「あら、なぜなの？ どうしてあなたはこれ以上のことを望まないの？」

彼は、彼女の細い骨ばった肩、短くて上を向いた鼻を見つめ、作り笑した。

「これはうまくいくと思ってたのに、今はもうだめだ。もう何も感じないんだ。」

「私はあなたに優しくなかった？」彼女はテーブルの上を見た。闇の中にリキュールの瓶があり、明かりが通りから部屋の中にさしこんでいたので、その瓶とグラスがほのかに光っていた。

「あなたは少しリキュールを飲んで、蓄音機を聴いた。それでも気分が盛り上がらなかったの？」

「ああ、こんなガラクタじゃあね」と、ペーターは言った。

「あなたはまともじゃないわ」と、彼女は言う、またベッドに横たわり、毛布をあごまでかぶった。

「もう服を着るがいいわ！」

彼は、またベッドの縁に腰を下ろし、自分の靴の方にかがみ込んだ。うしろから彼女が近寄り、乳房を彼の背中に

押しつけ、肩越しに、開いたシャツの中に手を突っ込んで、彼の胸をなでた。

「もうやめろよ」と、彼は言った。

「こっちへ来てよ」と、彼女は言った。

「無駄だよ。」

「本当に何も感じないの、ペーター？ 自分の好きな人を手中にしたというのに、彼が全然乗ってこないなんて。」

「だめだ、僕にはできない」と、ペーターは言った。

「なぜできないの？」

「分からない。」

「とにかく、こっちへ来てよ」と、彼女は言った。「どうしてあなたはそんなに悲しそうにしてるの？…お馬鹿さんね…」

税関吏は、ぎごちなく勿体ぶって歩いていった。通りの片側にはオルベルス通りの白い家並があったが、窓は真っ暗かカーテンがかかかっていて静かだった。もう片側は鉄道の築堤になっていた。その草のはえた築堤は、街灯の光を浴びて幽霊のようにくすんだ緑色に見えた。築堤の上に、土手の木々の暗緑色の樹冠が伸びていた。税関吏の足音が、敷石の上に、硬く軍隊式に響いた。税関吏は、鉄道橋の下にソーセージの屋台を見つけた。白い仕事着に前垂れをかけたソーセージ屋が、石油ランプの赤っぽい光の下、湯気を上げる鍋のかたわらに立って、二人の労働者と語り合っていた。彼らはソーセージをばくつきながら談笑していた。税関吏はためらいがちに立ち止まった。労働者たちの笑い声は、鉄道橋の下でうつろに響いていた。それ以外には、通りはかなり静かだった。照明をユラユラさせた自転車が時々通り、自動車が橋の下をガタガタ通り抜けるだけだった。労働者たちが立ち去ったので、税関吏はためらわずに屋台に近づいた。もう焼いたソーセージのおいしそうな香りがした。

「こんばんは、税関の旦那、夜風に吹かれにお出かけですか？」

「見ての通りさ。クレムケさん」と、税関吏は落ち着き払って言った。彼の眼鏡のレンズがきらめいた。

「なるほどね、旦那。やっと外に出かけたり、散歩ができる時間になったわけですね。空気が少しは涼しくなりましたから。」

「商売はどうかね、クレムケさん？」と、税関吏は尋ねた。

「お陰様で」と、クレムケは満足げに笑いながら答えた。彼はテーブルにもたれ、一方の手を鍋のふたに添えて、親しげに体を少し前にかがめていた。彼の紅潮した丸い顔、青い目、短く刈り込んだ金髪、そのすべてが静かな満足で輝いて見えた。「こうした晩は、みなさん、外出して、通り

をぶらつき、談笑したり、ゆったりなさいます。日中の興奮がすべて消え失せ、みなさん、大気を胸一杯に吸い込んで楽しめます。すると、ひとりでに食欲がわいてまいります。ソーセージでも食べてみたいという希望がわいてくるわけです。それは至極当然のことです。カップルだって、まず築堤に駆け込み、思う存分抱き合っていたら、だんだん空腹になってくるでしょう…」

「よく分かったよ、クレムケさん」と、税関吏は言う、生真面目に鍋の方を見た。「それじゃあ、また焼きソーセージを二本くれないか。」

「お持ち帰り用にお包みしましょうか？」

「もちろんそうしてくれ、クレムケさん、いつも通りにね。」

「旦那」と、クレムケは言う、急にその純真そうな目で彼を悲しげに見つめた。「ちょっと、お尋ねしてもよろしいですか？」

「構わんよ、クレムケさん」と、税関吏は言う、通りの両側を落ち着きなく見やった。「できるだけ手短にお願いますよ。」

「旦那は、どうしてソーセージを店頭で平らげないんです？」

「いつも家に持って帰って食べてる。その方がうまいんだよ。どうしてそんなつまらないことを聞くんだい、クレムケさん。」

「旦那」と、クレムケは強い非難を込めて言った。「あなたがソーセージを家でではなく、上の築堤に行ってそこで召し上がるのは存じていますよ。」

「まあ、家でだろうと築堤でだろうと、同じことじゃないか。自分の思い通りにしてはいけないのかね、自分のソーセージを自分の好きな場所で食べていけないのかね？ 僕たちは結婚してるわけじゃないよ、クレムケさん。一体どうしたんだね、君の言うことはいつもはある程度筋が通っているんだが…」

「旦那、私が知りたいのは、あなたが築堤に行く理由です。店頭で食べるのはまずいんですか？」

「馬鹿なこと言うなよ」と、税関吏は声を荒げた。「全くナンセンスだ…」

「やっぱり当惑しておられますね。ここではまずいでしょう。でも、店頭で召し上がる方もたくさんおられるんですよ。」

「こんな馬鹿な話は聞いてられないよ。」

「旦那、正直に言ってください、私は間違っていますか？」

「たとえそうだとしてもだ、クレムケさん、それは君には関係のないことだ。つまらぬことを気に病む必要はないんだよ。」

「でも、心が傷つき、つらい気持ちになりますよ…」

「その必要はないよ、クレムケさん。子供じみた真似はよせよ。君だってこの世の中のことは十分わかまえてはいるはずだろう。」

「とんでもありません」と、クレムケは陰気に言った。

「ある種の限度、義務ってものが存在することは君にも分かるだろう。やはり自分の立場や職業にたいしては責任があるんだよ。」ふさぎ込んだクレムケは、税関吏の緑色の上着、金ボタン、輝く肩章を見つめた。「どこにでも制約はあります」と、彼は小声で言った。「でも、何のためなんですか？」

「いくら用心しても用心し過ぎることはないんだ」と、税関吏は言った。「敵意をもつ者が悪質な中傷をすることだ。みんながみんな君のような人間だったらと思うよ、クレムケさん。」

クレムケは了解して静かにうなずいた。彼は薄赤いソーセージを二本グリルにのせると、フォークを使ってそれをくるくる回し、脂がパチパチ音をたて狐色になるまで焼いた。

「君の職業に何も文句はないよ」と、税関吏は言った。「それは断じてない。まともな堅い商売だ。本当は楽じゃないんだろう。」「とくに冬場はそうです」と、クレムケは卑下しながら苦しげにつけくわえた。「寒いんでね。ちょうど今がそうです。」

「確かに今は楽じゃない、よく分かるよ」と、税関吏は言った。「何時間もテーブルの前に立っているとは、ご苦労なことだ。」

「時には腰をおろすこともありますよ」と、クレムケは言った。

「ともかく、感心なことだ。」

クレムケは、焼き上がったばかりの脂でツヤツヤしたソーセージを紙皿にとると、大盛のマスタードと小さなパンを添えて、全体をていねいに薄紙で包み、税関吏に手渡した。「さあ、旦那、ソーセージが焼き上がりました。まあ、上の築堤にでも行って、おいしくお食べください。どうか悪しからず。」

「それじゃあ、おやすみ、クレムケさん。あんたは別の男だ。感心なことだ。」

「おやすみなさい、旦那」と、クレムケは言って、勿体ぶって立ち去る税関吏をふさぎ込んで見送った。税関吏の足音は橋の下に反響し、彼の肩章は街灯の光を浴びてキラキラ光っていた。彼はソーセージの包みをぎごちなく捧げて運んだ。クレムケは、税関吏が築堤に姿を消すのを見ていた。

幼いルーゼはふたたび眠った。夢が彼女を目覚めさせ

たが、彼女は今、その夢を忘れて眠りに落ちていた。しかし、彼女の母親はあいかわらず眠れなかった。彼女は同じ部屋にいて、窓辺に歩み寄り、二年前からペトリの教会墓地に葬られている亡夫のことを思い出していた。そしてふたたび床につくと、目を開けたままベッドに横たわっていた。彼女は、ルーゼのことや幼い彼女の夢について考え、夫や図画の教師と結婚しているもう一人の娘アンニのことを思った。今はもうアンニは自分たちと一緒に眠ることはない。彼女は自分たちから解放されて、ある男のかたわらで眠っている。アンニはどんな気持ちでいるのだろうか、彼女はそのこととどのように折り合いをつけたのだろうか？ 彼女はそれについてほとんど語らなかった。この時、アンニは幸福ではなかった。彼女はふさぎこみ不安だった。ゲオルクはまだ教師陣との九柱戯から戻っておらず、彼女は一人きりで、やはり目を開けたままベッドに横たわり、何度も寝返りを打っていた…

やっとなんげとしかけた頃、鍵を開ける音で彼女は目を覚ました。ゲオルクだ！でも、どうして彼はあんなに廊下を踏みしめて歩き、騒々しくドアを閉めるのだろうか。本当に、あれはゲオルクなのだろうか？

ドアが大きく開き、人影が敷居に立った。忍び笑いが聞こえてきた。

「ゲオルク、明かりをつけてよ！」と、アンニは叫んだ。その人物は立ったまま、笑っていた。

アンニは、震える手で枕元の電灯のスイッチをひねった。それはゲオルクだった。「どうして私をおどかすの、ゲオルク、ゲオルクったら。あなた、酔っ払ってるの？ 酔っ払ってるのね。」

ゲオルクは、もたもたと両手でドアを閉め、よろよろ部屋の中に転がり込み、アンニのベッドの背後の壁にしがみついて、前方に身を屈めたまま白痴のようにニヤニヤ笑った。「ああ、楽しかった」と、彼は呂律の回らぬ口で話した。「ヴァイオリンを弾く若者たちや教師仲間と一緒にだったんだ。僕の小鳩はどうしたかな？ 小鳩のところへ戻って、寝ようかな？」

「ゲオルク、やめてよ。あなた、本当に酔っ払ってるのね。ゲオルク、私の言うことを聞いて、馬鹿な真似はやめて。」

しかし、ゲオルクは彼女の言葉には耳を貸さず、クックッと含み笑いをし、大きなげっぷをした。彼は、指を突き出し何か言おうとしたが言葉が出てこず、鏡付きの戸棚の方によろめいて、腕をつっぱって戸棚にしがみつくと、鏡の中の自分の顔をにらみつけた。「今晩は」と、彼は言うように、自分の鏡像に向かってお辞儀をした。「何かご用ですか？ ここで何をするつもりなんです？ 僕の家内のそばで。」

「あなたがそんなつもりなら、私はあなたの妻じゃないわ」と、アンニは叫んだ。彼女は体を硬直させてベッドに横たわり、少し体を起こすと、毛布を頭のところまで引っ張り上げた。ゲオルクのあの優しい顔は、彼の穏やかで親しみにみちた態度はどこへ行ってしまったんだ？ 彼がもし自分の体に触れたら、彼女は叫び声を上げるどころだった。部屋の外に逃げ出したかも知れない。彼女は、晩に、見知らぬ家で見知らぬ男に身をゆだねて、まったく孤独だった…。

ゲオルクは、鏡の中に、アンニの度を失った顔、大きく見開かれた目、不快のあまり歪められた唇、白い顔にまとりついた黒い髪を見た。彼は、震えながら毛布をたぐり寄せる小さなほっそりした手を見た。彼は振り向き、起き上がって、自然な足取りで彼女のベッドに近寄り、少し当惑しながら穏やかに微笑んだ。

「冗談だよ。酔った振りをしていただけだよ。」

アンニは、しばらく試すように彼をじっと見つめていた。それから相好をくずし、おずおずと微笑むと、泣き出した。彼女はふたたびベッドに倒れ込んで、やつれ果てはしたが幸福そうに泣いていた。

「そんなことをするなよ。僕が悪かった。」

ゲオルクは彼女のベッドの縁に腰を下ろすと、当惑しな

がら彼女を見つめた。「ふざけてみたかったただだよ。君は可笑しいとは思わなかったのかい？」

「ええ、ちっとも可笑しくなかったわ。ひどく怖かったのよ。私は急にとても孤独になったの。あなたはもうここにいなかったんですもの。この部屋の中にいたのは、見知らぬ男だったのよ。」

「でも、僕はもうここに戻ってきたよ。僕を見てごらん。まったく正気だよ。実はほとんど酒を飲まなかったんだ。」

彼はそっと彼女の髪をなでた。

アンニはまた、試すように彼の顔をのぞき込んだ。

「もう駄目かと思ったわ。」

「馬鹿なやつだな」と、ゲオルクは言った。

彼らは長い間、見つめ合っていた。アンニの顔は明るく晴れやかになった。彼女は微笑んだ。ゲオルクも微笑んでいた。

「自分の本心を隠すようなことは」と、彼女は言って、少し頭を振った。「もう二度としないでね。」風が、穏やかな微風が、開いた窓から入ってきて、白いカーテンをふくらませた。

「分かったよ」と、彼は言った。彼は穏やかに彼女のベッドのそばに腰を下ろし、彼らはお互いに見つめ合い、相手のことを完全に理解していた。